

明治の佐伯三青年 (20)

—— 龍 溪 ・ 鳴 鶴 ・ 鶴 谷 ——

矢野官界入り

御手洗 一 而

(賛助会員・川越市小堤)

土佐派の一統が次々に捕縄され矢野自身不安にかられる毎日であったが、その矢先に大久保郷が刺殺された。報知社内もその論評で騒々しかったが、そんなある日、矢野の出家を藤田が待ちうけていた。

「矢野さん。沼間さんからの連絡が届いていますよ」

矢野は沼間氏からの連絡を聞いてほっとした。

「市中で会うのも種々な眼が気にかゝるから、次の日曜日に獺に出掛けようとのことでした。」

早朝、江戸川を渡って落ち合おうとのことでした」

「そうか。これで一安心、又何か情報が聞かれるわい」

「これからの政府の体制と方針を探ってみて下さい」

「よし。沼間氏に会えば自然に何かわかるわい、茂吉」
矢野は久しぶりに会う沼間氏との会合に眼を輝かせていた。

当日、矢野は夜明け前に江戸川を渡り、行徳村の入口で沼間を待った。沼間は少し遅れて相変らず飄々と矢野の前に現れた。

沼間は、この頃元老院に出仕し、権大書記官の役人でありながら、法律講習会のような「嚶鳴社」を主宰し、演説討論の練習もするという異色の人物である。西南の役が起った時、矢野と組んで自衛協会の設立を計ったことは前に書いた。

「暫くぶりじゃのう矢野」

「はい。いろいろな事がありました」

「人殺しやらお縄の件か」

沼間はしやあしやあとしていた。

「西郷に続いて大久保卿も殺られました。無意味な決起と思われませんが……」

「そうじゃ。大久保一人を倒して政府が倒れると思うのも幼稚すぎる。民権と騒いだところで順序がある。」

維新後の変革だけでも早過ぎる。加賀の奴等も馬鹿な奴じゃ」

沼間の得意な馬鹿呼ばわりが出た。歩きながら朝の靄もが次第に晴れてきた。

「いい獲物でも狙いますか」

矢野は話題をそらした。

「いい獲物はいいがのう、こういう時に大江のいないのも淋しいのう」

矢野も同感であった。

「謀反ととられたのでしょうか」

矢野は沼間の顔色を窺うように問うた。

「俺にもわからん。だが、どうせやるなら、一か八か旗上げすりゃいいものを、もたもたしているからこんな事になる」

沼間は相変らず口が荒いが、矢野はこの事件の決着の方が心配であった。

「一件落着でしょうか」

「気になるか」

沼間は矢野の心中を見通したように睨みつけながら、人差し指で自分をさした。

「俺にお前と言いたいところだが、まだ罪人が出るかもしれない」

「罪人」という言葉に矢野はぎくりとした。

「心配するな。自衛協会と謀反とでは意味が違うぞ」

沼間はこう言って声を出して高笑いした。

矢野も、言われてみれば成る程そうだと思い当り、幾分気が楽になった。

狩場の行徳村は、この当時はまだ宮内省の獵場にはなっていないかった。早朝のこの海浜は、いつも薄靄もが張って、忍び撃ちの好きな矢野にはうってつけの場所であった。

視界が広がってくると、青頸の真鴨の一つがいの雄と雌が運よく矢野の眼に入り、矢野はそっと沼間の袖を引っ張った。

「一刀両断」

矢野はそう言いながら新銃をぼんと叩いた。

「ほう。いい奴を仕入れたな、両眼銃か」

沼間は、感心していた。

「返す刀で二羽をしとめて見せる」

矢野は太刀になぞらえながらこう言つて狙いを定めた。
矢野は始めに雄に照準をつけた。

「ばーん」

一呼吸した発射音は確かに手応えがあった。同時に驚いた雌が飛び上がった。

「ばーん」

間髪を入れず第二弾の発射音が辺りに響くと、雌はひらひらと舞うように地上に落ちた。

「見事じゃのう矢野」

沼間 hands を叩いて矢野の手練をほめた。

「うまくいった」

矢野は両眼鏡を撫でるようにして得意であつた。

この日は、二人とも思わぬ収穫にありつき、予定より早く引き揚げることにした。

帰り途、二人は船着場の茶屋で一服した。

「こう世間がうるさくては、新橋で一杯というわけにもゆくまい。こゝで一杯やるか」

沼間はこう言つて矢野にも酒をすゝめた。

「沼間さんも用心深いところがある」

矢野は感心したように笑つた。

「馬鹿。真剣に日本の将来を考えながら、勝手に都合主義の色眼で見られてはかなわぬ」

「成る程。ご都合主義の色眼とは良いことを言われる」

「当り前じゃ。そこらの壮士と一しよにされてたまるか」

「その通り。近頃では民権運動に対する弾圧も厳しくなりつゝある」

「政府は大衆運動の歯止めを考えている」

「例の三新法ですか」

「そうじゃ。地方の編制法、府県会規則、地方税規則民権の前に選挙人の資格を限定する腹らしい」

「ますますやり難くなる」

「政府にも知恵者がいる。だがなあ、それどころではないんだ。西南の役の借金を清算する方が急務じゃ。馬鹿な乱を起しやがって、大隈大蔵卿は尻ぬぐいに頭を痛めている」

沼間の話は言葉こそ悪いが、話していることは、矢野も承知の慧眼であつた。

矢野はいろいろな話に耳を傾け、多難な問題に得るところが多かつた。

二人はほろ酔い機嫌で、帰途に船路を楽しみ、話題はつきなかった。

翌日、矢野は獲物から恩師のご無沙汰払いを思いつき自慢話と雌雄の真鴨をぶら下げて、三田の福沢邸を訪れた。

矢野にとっては久しぶりの訪問であつたが、福沢はこの他喜んで矢野を迎えた。

「矢野か。よいところへ来てくれた。今日にも手紙か使いを出して、ご足労願おうと思つていた」

福沢の言葉には、何か意味がありそうだった。

「何か急用でも——」

「うん。鴨の土産も有難いが他でもない」

福沢はこう言つて一息入れた。

「大隈大蔵卿から部下の推挙を依頼されて人選に當つてゐる」

矢野は、一瞬師の言葉を疑つた。

あれ程役人嫌いの恩師がと、疑いながら福沢の次の話を待った。そして、まさかこの俺に役人になれというのではなからうと、じつと福沢の眼を見つめた。

「わたしも近頃少し考えるところがあつてな」

福沢は柔かく切り出した。

「外部からの運動が厳しくなれば、内部に入つて改革する手段も面白いのではないかと思うようになった。

まして、大隈ならば、われわれの主旨もよく理解してくれ、事を運ぶのに好都合だと思つてゐる」

矢野はここまで聞いて、成る程、民権による国会開設という目標には、在野からと内部から、両面の進路がより効果的であることは周知の事実である。矢野は他人事のように客観的にこの説明を聞いていたが、名前を呼ばれて我に返つた。

「ところで人選だが矢野君」

暫く間があつた。

「仲々適任者もないものじゃ。おとなしいだけでも困るが、藤田では勤まるまい。政治と直結するとなるとやはりこゝは矢野君の出番ではないかと思つてゐる」

「私が——」

矢野は一瞬耳を疑つた。

「民権の矢野が、内部から国会開設を急がせても、決しておかしくはあるまい」

矢野は道理こそわからぬではなかったが、突嗟に承諾出来るほど単純な問題ではなかった。

「急にと言われても決心がつかねると思う。それに待遇のこともあれば、藤田や父君にもよく相談して考えるがよい。唯、大隈卿は悪いようにはせぬ男じゃ」福沢はこう言つて大隈には信頼を寄せているふうであつた。

矢野は暫く考えてから、自分の納得の上で藤田や父に話して見ようと思つていた。その矢先、元老院幹事陸奥宗光が拘引された。

矢野は、この一件を知ると、突嗟に、沼間が言つた「罪人」を思い出し、沼間はすでに知つていたのではないかと思ひ當つた。

それにしても、沼間は陸奥を評して、「謀反気のある男」といい、京都では伊藤に、「紀州兵はどちらを向いて鉄砲を撃つかわからない」と聞かされ、今更情報的確さを思ひ知らされる思ひだつた。

こうなると、矢野自身、自分達の知らないところではいつも何かゞ起つていゝという幕外の焦燥感にかられ、

いゝそのこと、政府部内に入つて、思い切り引っかけ廻してやろうかという正義感もあつた。

矢野は内密に藤田にこの事をうちあけた。藤田は藤田なりに、在野と内部からと両面作戦をとれるのも面白いではないかと乗り氣であつたが、矢野は密かに栗本御大の出現を待つていた。

この頃、栗本鋤雲は政通新聞にも関係し、学士會員に推されて多忙の日々を送り、報知社には時折り顔を出す程度であつた。

矢野は御大の顔を見ると、挨拶もそこそこに別室に招き、出仕の是非について相談した。外は何時しか汗ばむ陽氣になつていた。御大は汗をふきふき、じつと矢野の話を聞いていた。

「どのような形にしろ、お国のためにこれだと思つたら自信を持つて進むがよい。悪い話だとは思わない。たゞし、西郷や大久保がいらないからといって、薩摩をあれどつてはいけない。維新を成就させた薩長には、眼に見えぬ力がある。民権運動も決してあせつてはならない。個人の力でどうなるものでもない。時期を誤

ると墓穴を掘ることになる。それだけ頭に入れておけば思い切り暴れてみるがよい。若い時に悔いを残さぬのも一つの試練じゃ」

御大はこれだけ言って多くを語らなかつた。

矢野は御大の忠告を熟慮しながら、最後に父光儀に意見を求めた。

県知事を勤めた光儀は、わが子の官界入りをむしろ喜んでゐるふうであつた。たゞし、その待遇についてはたしなめられた。

矢野は、官界入りに際して、奏任の最上級の地位を要求していたが、通常初出仕は、末席の奏任七等と相場が決まっていた。矢野はそれでは不服であつた。

翌日、矢野はこの事を藤田に話すと、藤田も「最初から無理だ」と笑っていた。

「望む席でもないのに末席では馬鹿馬鹿しいが、無理な要求は福沢さんに失礼に当ると諭された。任せるしか仕方がないか」

矢野はこう言つて大して嬉しそつでもなかつたが、

「落ち着くところに落ち着く。これでいよいよ根廻し完了ですか」

と、藤田の方が一安心の様子だつた。

矢野の待遇は、三級の少書記官で折り合うことになつて出仕が内定したが、藤田の想定する根廻しとはこうである。

野にあっては、板垣・後藤等の土佐派は、愛国社の再興を決議してすでに動き出している。大久保卿亡きあと政府の人事は、伊藤博文が内務卿、井上馨が工部卿となり、大隈大藏卿と組んで政府の実権を握ることになつた。福沢は門下生を政府部内に入れて、国会開設の地盤を築き、言論界は報知社を利用すれば、これで三者三様の体制が整うことになる。

矢野や藤田の脳裏には、着実に一歩ずつの前進が映し出されていた。そして、進歩的な大隈と福沢の気脈が、政府部内をリード出来ると信じてゐるふうであつた。そのためにも、藩閥のない大隈にとっては、三田系の加入は貴重な援軍になるはずである。だが、栗本御大が忠告した通り、若い二人にとって、この時点で政権の先を見通すことは困難であつた。困難というよりも、現在の二人にとっては薩長も土肥もなかつた。理想の実現のため

に、国会開設を急務とする。自説に最も近い人を盛り立てるだけのことであった。

しかし、現実には藩閥の力は大きかった。

この明治十一年七月は、矢野にとっては、官界入りの記念すべき月であったが、自由民権運動の別の路線を生み出す「地方三大新法」公布の月でもあった。

立志者の連中は、予定通り、この年の九月十一日、大阪で愛国社を再興するが、当初の期待とは異なり、「米会せしものは土州を始め唯士族社会のみにして、未だ平民の隻影をも見る能はざりし」という、状況であった。会はまだまだ不平士族の残党の集合といった方が早かった。

それにひきかえ、地方府県会が設置されると、土地の豪農豪商は、やがて政府に対する不満を募らせて結集されていった。この潮流は、年を越した十二年から十三年にかけて、自然に全国的に波及するが、愛国社が求めて吸収し得なかった庶民層は、平民達が豪農豪商と結んで又民権運動の別の一派を生み出して動き出すことになる。

私の戦争小史

横 丁 登

(会員・佐伯市太平区)

昭和二十年三月三十一日、大野郡小野市東小学校長拝命、四月一日応召、赤紙又は一銭五厘とも言った。清田義雄君は福岡大学教授の地位にありながら共に壱岐の島へ。清田君は成績抜群で、短現中唯一人士官適任証受領なので炊事軍曹。私は中隊と大隊との連絡兵として勤務。よく清田君の所に寄りこ馳走になった。栄養万点、体重六十数キロ。小生初めて六十キロを越えた。

なお、早野先生・大西先生共に補充兵として散兵壕掘の重労働。よく慰問して「ほまれ」を吸いながら休養。両先生とも大いに喜んでくれた。

戦争末期は人も物資も不足、それで兵士も二階級上の勤務を命ぜられ、私は兵長だった。四十年ぶりに壱岐へ二泊三日の旅をしてきた。

(五月十六日記)